1949年９月17日第三種郵便物認可　毎月10日発行　第692号（通巻1196号）　定価１部40円

創立1880年 YMCA

東京YMCA

2012 1・2月号

発行所　公益財団法人東京ＹＭＣＡ　発行人　廣田光司
135-0016　東京都江東区東陽2-2-20　電話　03-3615-5562　URL http://tokyo.ymca.or.jp

東京ＹＭＣＡの使命

東京ＹＭＣＡは、イエス・キリストによって示された愛と奉仕の精神にもとづいて、青少年の精神、知性、身体の全人的成長を願い、地域社会に奉仕し、公正で平和な世界をつくるための運動を展開する。

支え合い、希望へ

わたしたちは知っています。苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生むということを。希望はわたしたちを欺く（あざむく）ことがありません。　（『ローマの信徒への手紙』５章３～５節、新約聖書新共同訳）

妙高高原ロッジでのリフレッシュキャンプ（▼２面参照）。スキーや雪だるま作りなどを行った。写真下は雪上大運動会。

↑リフレッシュキャンプ（山中湖第２期）では、福島のご家族らがスケートなどを楽しんだ。写真はワカサギ釣り。

石巻市の仮設グループホーム「あゆかわの郷」で、第２回ＹＭＣＡ歌の広場を開催。→

社会に用いられて

公益財団法人東京ＹＭＣＡ
総主事・代表理事
廣田　光司

会員の皆様の熱い思いと神様の導きによって、２０１２年の新しい年を迎えられます恵みを感謝いたします。

昨年の歩みの中で特筆すべきことは、公益財団法人「東京ＹＭＣＡ」として認定されたことです。東京ＹＭＣＡが「社会のために存在する団体」であることが証明されたわけです。

また、新拠点「グランチャ東雲」が与えられ活動を開始しました。登録者はすでに１万６０００人を越えて、高齢者と子どもが触れ合う場所として地域の期待が高まっています。東京ＹＭＣＡが１３０年の歴史の中で培ってきたノウハウが社会に用いられていると言えます。

３月11日には東日本大震災が発生しました。私たちは仙台ＹＭＣＡと協力し、初期の段階からランタンなどの支援物資を届け、復旧作業を荷うことに会員・ボランティアが活躍しました。年末には石巻に新たな拠点を設けて今後の長期的な支援に備えることができました。地域の絆が必要とされている現状の中で、これまでの活動の中で培ってきた経験を活かして「歌の広場」を開催して喜ばれています。被災地では当初多くのボランティアが活動していましたが、月日が経つとともにその数は少なくなっています。東京ＹＭＣＡは長期にわたり復興の支援を続けて行きたいと思っています。

福島の子どもたち・ご家族をＹＭＣＡのキャンプ場に招く「リフレッシュキャンプ」は14期（５００人以上参加）開催し、皆様に喜ばれています（写真）。ＹＭＣＡのもっているキャンプという財産を活かし、息の長い支援を通じて復興の力を現地の子どもたちに託して行こうとしています。

公益財団法人には財政上の大きな課題がありますが、２０１２年も会員の皆様と共に、神様に喜ばれる活動を続けてまいります。今年もよろしくお願いします。

新たな年を迎えて

公益財団法人東京ＹＭＣＡ
評議員会会長
勝田　正佳

東京ＹＭＣＡは昨年４月に公益財団法人へ移行し新たな年を迎えました。一層の公益性を求められますが、寄付、会費は優遇税制の適用を受けることができるようになりました。評議員会は、事業計画、予算、役員人事等を決議しますが、業務執行は理事会に置かれます。

東日本大震災、原発事故など不安・混沌な世相の下でのスタートでありましたが、しかし早速、国内外からの寄付、災害救援募金もあり、ワイズメンズクラブとの連携によって運動体としての役割を果たし、現在なおその活動を継続しています。その結果ＹＭＣＡのアイデンティティーと社会的評価を高めています。これからも寄付、募金をふまえて、特に被災者の青少年を対象にした救援復興活動へ貢献していきたい。

一方、新法人は目的達成のための手段として各種事業を持ちますが、その不採算性を改善することが喫緊の課題であります。どんな事業も新規参入、イノベーションによって当初プログラムは劣化しますし、寿命もあります。守株して一兎を待つことがあってはならないのです。中長期計画委員会の計画案とその実行を期待します。また職員一同は実状を理解し協力してください。

近年行政からの受託事業が増えてきています。それらに従事するスタッフの研修を重ねることで付託に応えるよう努めていきましょう。

新法人スタートのこの機会に、定款の「目的」、会則の「前文」「目的」「活動」を再読してみましょう。ここに東京ＹＭＣＡの原点があるからです。運動体と事業体のバランスを配慮しつつ、伝統ある開拓者的精神、国際交流、そして高い志をもって共に夢を語り合い、ムーブメントを伴う活き活きとした集団としての新たなスタートの年にしようではありませんか。

不透明な世界の中で

学校法人東京ＹＭＣＡ学院
理事長
徳久　俊彦

新しい年を迎えて、皆様も気持を新たにして、お過ごしのことと存じます。

昨年は3月の東日本大震災を始め、豪雨による土砂崩れ、洪水など、災害の多い年でした。日本ばかりでなく、タイ国など世界各地で自然災害が発生し、多くの人々が亡くなり、沢山の人が家族や家を失いました。不意に命を奪われた方々の無念を想い、被災され残された方々の苦しみを察する時、言葉もありません。

戦争や紛争も一向に収まりません。その上欧州で始まった財政危機による金融・経済全般への影響も広がりつつあり、日本の財政赤字も問題になっております。その上今年は、北朝鮮の首脳問題を初め世界各国で首脳選挙が行われ、先行き何が起こるか判りません。

このように世界中が「展望」が持てない時に当り、東京ＹＭＣＡとしては、どのように対処すべきでしょうか？　ＹＭＣＡの原点に立ち還って、社会のニーズに応えるべく、祈り求め、実践を重ね、それを検証しつつ進むことが大事だと思います。

東京ＹＭＣＡ学院は、昨年４月、「しののめＹＭＣＡこども園」を開設することが出来ました。お蔭様で保育園、幼稚園ともに順調に滑り出し、その歩みを進めております。暮には最初のクリスマスを祝うことが出来ました。江東ＹＭＣＡ幼稚園も先輩として「しののめＹＭＣＡこども園」を応援すると共に、新たな歩みを始めました。ここは建物の老朽化が進んでおり、江東ＹＭＣＡと共に長期的展望を立てることが課題です。国立市にある医療福祉専門学校は学生の確保が課題ですが、介護福祉科を中心に上向きに転じて来ており、ここも建物が手狭でフル稼働している上、「手入れ」が必要な時期になっており、やはり施設面の充実が課題です。

東京ＹＭＣＡ学院はこのような課題を負いつつ、新しい年の歩みを始めます。どうぞよろしくお願い申し上げます。

赤▽三角

東京ＹＭＣＡが公益財団法人として認定され新たなスタートを切ったことは、一画期的な意義を持つ。非営利部門が公益のために重要な役割を担うようになってきたのは世界的な流れであるが、現実に今まで認められていなかった寄付金への所得控除や税額控除の対象と認定されたことは、東京Ｙの活動が公益の担い手として相応しいとの評価を得たと思うからである▼このことは、その評価に答える責任が飛躍的に増大したことを意味する。そのためには何が必要か。何よりも使命を明確に確認し直し、関係者の間で共有することが大切である▼現在の「使命」を変えることは必ずしも必要でなかろうが、例えば「東京ＹＭＣＡは、イエス・キリストの愛の精神にもとづき、若者の持てる力を引き出し、公益に資する自覚を持って、内外のコミュニティーに奉仕する具体的な行動を展開することを使命とする。」などと言い換えて、わかりやすい表現を用いて使命の共有と、それに即した業務運営基準の明確化を図ることが大切である▼その際、類似の活動は他の組織によっても提供されているので、ＹＭＣＡの伝統や心と精神が感じられる他とは明らかに違う特色を発揮することによって社会に評価されることが大切である。また、託された資源の有効な使い方や管理の透明性を示す説明責任が厳しく問われることを肝に銘ずるべきである。（評議員　山本　和）

We build strong kids, strong families, strong communities. YMCAは、たくましい子どもたち、家族の強い絆、支えあう地域社会を築きます。

シンポジウム

居場所と貧困と労働

働けないと生きてちゃいけないのかな

12月11日（日）、早稲田奉仕園キリスト教会館で、シンポジウム「居場所と貧困と労働～働けないと生きてちゃいけないのかな～」を開催した。主催は東京ＹＭＣＡオープンスペースｌｉｂｙ（リビー）、後援は日本クリチャンアカデミー。日本郵便からは平成23年度年賀寄附金配分事業として助成をいただいた。参加者は74名と盛会で、３名のシンポジストからは「はたらく」をテーマにお話いただいた。

シンポジストの西野博之氏（ＮＰＯ法人フリースペースたまりば理事長）は、20年に渡る学校以外の居場所作りの関わりの中から仕事への取り組みを中心に話された。「お金をかけないで貧しく生きていく方向性を目指してもいいんじゃないか？」「政府の就労・自立支援などとは違った形で新しい生き方を探りたい」という発題や「存在をどこまでも肯定する」という暖かい想いを語られた。

中村あずさ氏（ＮＧＯ世界の医療団）からは、路上生活者との関わりからのお話を聴いた。次々に人が倒れて亡くなっていく路上で、炊き出しが生存確認の場になっている。昨日会った人にまた会えた時、「生きているだけでいい」という世紀の大発見をした！というお話が印象深い。

石川憲彦氏（児童精神科・小児科医）のお話には、自尊という言葉が出てきた。自尊は本来self-respect（セルフリスペクト＝自分を尊重すること）であるが、self-esteem（セルフエスティーム＝外部評価）として使われることが多い。他者からの評価を軸とした世界では、誰もが苦しくなってくる。本来の自尊心をもてる社会になること。そのためには豊かさを求めていくのではなく、「貧しさを共有していく」ことが大事になってくると語られた。

↑写真右から、石川憲彦氏、西野博之氏、中村あずさ氏、司会の中島浩籌氏

キーワードは「貧しさの共有」

ニート・引きこもりなどの若者や障害のある人への就労訓練や自立支援が行政によって広く展開されているが、トレーニングを受けたとしても、実際に戻っていく社会の仕組みは何も変わらない。３人のシンポジストは共通してそこを訴えた。今後社会はますます機械化され、やがて職を失う人たちがたくさん出てくる。このまま自己責任の論理で進むことには無理がある。

「現状の制度とどう付き合うか」という質問が出たが、今の仕組みは利用するしかない。社会の仕組みを変えていく爆発的なエネルギーも必要だが、やはり私たちは、今の生き方を見直す必要がありそうだ。それには石川氏の話す「貧しさの共有」がキーワードになるように思う。大きな震災を受け厳しい現状が続いているが、だからこそ共に生き合う社会を作る機会だ。ＹＭＣＡには人と人がつながる力とネットワークがある。私たちから新しい生き方を発信していきたい。

（ｌｉｂｙ　小倉哲）

復興支援　一歩一歩継続中

東日本大震災支援活動近況

■ リフレッシュキャンプ

毎回好評を得て実施しているリフレッシュキャンプ（協賛：三菱商事㈱）は冬休み中、山中湖センターで３期（子ども対象１期、家族対象２期）と妙高高原ロッジで２期（子ども対象１期、家族対象１期）にわたり開催し、福島県の子どもやご家族計２１３名を招待しました。

妙高高原ではスキーや雪だるま作り、雪上大運動会など、立地を活かして雪を満喫しました。山中湖センターでは焚き火を作って焼きリンゴを食べたり、広いフィールドを走り回ったりした他、ワカサギ釣りやスケートなども楽しみました。このキャンプは、屋外での活動が制限されている福島の子どもたちのリフレッシュの場として、地元の新聞に掲載されるなどして広まっています。また、保護者にとっても良い情報交換の場となっているようです。

■ キッズスカラーシップ

東京ＹＭＣＡのウインタープログラムに、被災地の子どもたちを招待する「キッズスカラーシップ」（協賛・・三菱商事㈱）には、都内近郊で避難生活を送る子どもたちなど52名が、スキーキャンプやディキャンプに参加しました。東北の子どもたちにとってスキーは、毎冬の楽しみであることもあり、大変喜ばれました。

■ 復興支援活動クリスマス募金

12月16日の夕方５時～７時、会員と職員20名が東京駅前で街頭募金を行い、４万７８０８円が集められたほか、会員みなさまのご協力により、合計１５１万５、８２７円のご支援が寄せられました。感謝して、今後の支援に用いさせていただきます。

■ ＹＭＣＡ歌の広場

12月20日、第２回ＹＭＣＡ歌の広場を石巻市の仮設グループホーム「あゆかわの郷」にて実施しました。今回は東京ＹＭＣＡ南センターで歌声サロンをはじめて10周年となる「ＹＭＣＡすずらん会」から、７名の皆さんにご協力いただき、20名のグループホームの方々と楽しいひと時を過ごすことができました。

（会員部　村上祐介）

石巻「ＹＭＣＡ歌の広場」に参加して

南センター会員　小川圭一

辛く厳しい震災体験を抱えている人々に、少しでも力になれることは何かと考えていましたが、童謡唱歌を歌うという形でボランティアに伺えたことは、有難いことでした。それは、ＹＭＣＡが継続的に支援活動を行っている地域であるため、後続のチームが居ることでリラックスした活動ができました。

音楽療法では、その時の気分に合わせた音楽を聴くのが良いとする“同質の原理”がありますが、「あゆかわの郷」の皆さんと、「鞠と殿様」や「浦島太郎」など物語歌で交流ができたという実感がありました。また、すずらん会でも好評の「肩たたき」のパフォーマンスで笑顔を見ることができたのもうれしいことでした。

これからは、東京以外にももうひとつの居場所としての石巻があることを感謝して、ワイズメンズクラブやすずらん会の皆さんと手をとりあい、ボランティアライフに励んで行きたいと思います。

＊その夜宿泊したJAL City仙台で、すずらん会の荒木さんがバーテンダーさんに歌の広場の話をしたところ、ジンジャーエール代を半額にしてくださいました！

「神の愛」の実践が「奉仕」になる

論考

ＹＭＣＡとキリスト教

『東京ＹＭＣＡの使命』（左記参照）には、「イエス・キリストによって示された愛と奉仕の精神にもとづいて」とあります。『日本ＹＭＣＡ基本原則』にも、ほぼ同文が掲げられています。ＹＭＣＡは教会ではありませんから、キリスト教を信じなさいとは書かれていませんが、それを基盤にしているわけです。しかし、それは一体どのようなことでしょうか。12月、職員のための研修で、上林順一郎牧師にお話いただきました。その一部をご紹介します。

東京ＹＭＣＡの使命

東京ＹＭＣＡは、イエス・キリストによって示された愛と奉仕の精神にもとづいて、青少年の精神、知性、身体の全人的成長を願い、地域社会に奉仕し、公正で平和な世界をつくるための運動を展開する。

上林順一郎（かんばやし　じゅんいちろう）牧師

日本キリスト教団松山教会牧師。『なろうとして、なれない時』（現代思想社）他著書多数。『ＹＭＣＡスタディシリーズ⑯　私たちの使命』も執筆されるなど、長年にわたり指導下さっている。

日本語の「愛」の語源は、「遭う、出会う」であり、出会った人とのつながりや絆から愛が生じると理解されています。その昔は「哀」という言葉の方が使われていました。「哀」は「衣」と「口」から作られた漢字で、「袖口をくわえてすすり泣く」姿を表しており、誰かをいとおしみ悲しむことを意味します。

一方、聖書における愛には、「エロース」「フィロス」「アガペー」の３種類があります。「エロース」は、今ではもっぱら性的な愛を意味する言葉として使われていますが、もともとは人間同士の愛を意味し、人類愛にまで高められていくような高尚な愛、同胞愛です。「フィロス」は、友愛、家族愛など、身近なものへ愛を意味します。

しかし聖書の中でもっとも強調されているのは「アガペー」です。「アガペー」は、神の愛、イエス・キリストの愛で、報いを求めない愛であり、自己犠牲の愛、敵をも愛する愛です。すべての人が神の愛の対象であり、等しく公平で公正です。

東京駅の丸の内口を出た所に「青年の像」という銅像があります。青年が両手を広げて天を仰ぐ姿の銅像ですが、その土台に「アガペー」とギリシャ語で書かれています。これは戦後、クリスチャン有志の主唱により造られたものです。戦争直後は、家を失った人、家族を失った人がたくさんいました。衣食住が決定的に欠乏しており、衣食住が皆の最大の希望でした。しかしその時代に、日本に本当に必要なものは愛であるとしてこの像は造られました。衣食住は確かに必要ですが、希望や愛を失った社会の中で、人が求めなければならない姿を現すものとして作られたのです。

最近、家族の中での殺傷事件が頻繁に起きるようになりました。親が子を、子が親を、夫が妻を、妻が夫を傷つけ、子を虐待する。こうしたものの背景に何があるかというと、根本的には愛が失われているといえるでしょう。３つの愛、とりわけアガペーの愛が失われているのです。

キリスト教の精神は愛です。エロースやフィロスの愛は、自分が気に入った人を愛すること、仲間や親しい人、役に立つ人を愛するものですが、アガペーは、憎むべき敵をも愛する、自分にとって損になる人をも愛することです。

たとえて言えば、聖書の「良きサマリヤ人」の話です。このサマリヤ人は強盗にあって半殺しにされているユダヤ人を見つけ、哀れに思い、敵対関係にあったにもかかわらず、自分のロバに乗せて宿屋へ連れて行き介抱しました。敵を愛することは、普通はできないことですが、彼はそれを行ったのです。それがアガペーの愛です。

先日、「大地の詩（うた）」という映画を見ました。主人公の留岡幸助（とめおかこうすけ　1864-1934）という牧師は、北海道の監獄所の教誨師（きょうかいし）でした。その当時、囚人は牛や馬のような扱いを受け、虐待されていました。しかし留岡は、彼らが罪を犯さないようにするためには、何よりも家庭が大切であると考え、「家庭学校」を作りました。これは、現在の児童養護施設の先駆であり、児童福祉の出発点になりました。

彼は神の愛を表現しようとしたのです。神の愛を現実の世界で実践しようとする時、それが「奉仕」になります。

「奉仕」という言葉は、現在は、困っている人を助けるといった意味で使われていますが、漢字の「奉」はもともと、たてまつること、神に物を奉げること、神に仕えることを意味します。英語ではｓｅｒｖｉｃｅであり、礼拝を意味します。神へのサービスです。ギリシャ語では「ディアコニア」と言います。これは食卓の準備をする、給仕をするという意味です。共に食事をするということも意味します。

先ほどの留岡幸助は、収監所にいたとき、囚人と一緒に食事をしました。「神は愛なり」と説教をしただけでは現実に愛はおこりません。単なる名詞の愛であれば、１００回だって言うことはできますが、何も伝わりません。そこで留岡は、説教をした後、普通は面会すら許されない重大犯罪者を家に招き、食事をしました。同じ仲間として一緒に食事をするということは、人間として共に生きるということです。

ＹＭＣＡの基本原則では「愛と奉仕」と並列に並んでいますが、これは別々のことではありません。名詞の「愛」でなく、動詞の「愛する」は、自分を放棄して他者のために生きることです。名詞として理解する愛は単なる知識であり、頭の中での理解にすぎませんが、「奉仕」という形で愛が実現していく、実践されていくわけです。

ＹＭＣＡの活動は、神と人への奉仕です。人への奉仕は、すなわち神へ奉仕していることですから、謙遜でなければなりません。神を礼拝し、人に奉仕し、共に生きていくこと。イエスの生き方が表現され、実行されていくこと。それがＹＭＣＡのミッションです。それでなければ、他の団体と変わらないことになります

だからといって、たとえばＹＭＣＡがやるサッカーが、何か特別なサッカーであるわけではありません。やっていることが他の団体と同じであったとしても、活動の中で、イエス・キリストの生き方をあらわそうという思いを持つか持たないかで、大きく違ってきます。どのような活動をする場合でも、活動の基盤を理解し、その思いが参加者に伝わっていくようでなければなりません。何を実現しようとしているか、何に根ざしているかが見えなければ、ＹＭＣＡはその意味を失ってしまいます。

「イエス・キリストにおいて示された愛と奉仕の精神に基づいて」という使命こそが、他にはないＹＭＣＡの独自性なのです。

（編集　広報室）

東京駅丸の内口にある「青年の像」。戦後直後に作られたこの像の土台には「愛」の文字が刻まれている。

ハーモニーコンサート
親子で本物の音楽を

12月10日（土）、玉川聖学院谷口ホールで「親と子のハーモニーコンサート」が開かれた。このコンサートは、「こどもたちと一緒に本物の音楽を」をテーマに行っており、0歳児を含む550名の親子が来場した。主催する東京ＹＭＣＡチャイルドケアセンターは園児20名の小規模な保育所だが、24の店舗が協賛くださり、保護者や地域の方など多くの協力によって開催されている。委員を務められた三浦朋子さんに、その思いをうかがった。

たくさんの子どもたちに聴かせたい

在園児保護者　三浦　朋子

ＹＭＣＡに兄弟でお世話になり4年のおつきあいになります。子どもを産んで以来、子育てと教員の仕事とで常にバタバタしており、両親が他界していることもあり、チャイルドケアセンターの先生方が私たち親子にとっては、心の支えでした。そんな中、昨年はじめてコンサートに委員として参加してみたら、素晴らしい歌声と本格的なホールの雰囲気に子ども私も感動し、もっともっと多くの子どもたちに聴かせたいと、今年もまた委員にさせていただきました。特に今年は震災があったため、親を亡くされた子どもたちに何かできないかと、出演者、スタッフ皆で考え、売り上げの一部を寄付させていただくことになりました。7月から何回もミーティングをし、「どうしたら、子どもたちと親が本物の音楽にふれ喜んでくれるか」を皆で試行錯誤しながら真剣に議論を重ね、当日を迎えました。力強く澄んだ歌声に子どもたちも引き込まれ、私たち親も心が癒されていきました。そして最後には会場全体で「ふるさと」を歌いながら自然と涙が溢れてきました。

こうした時だからこそ、皆で助け合い、思いを一つにするような機会が大切だとつくづく感じた一日でした。卒園してもこの素晴らしいコンサートのお手伝いができたらと思います。

最後に、震災で大変な思いをされている方たちの「心」と「ふるさと」の痛みが和らぐことを祈ってやみません。

北京から11名　研修受入れ

→北京の体育講師・祝彬さんは東陽町の子どもたちに伝統舞踊を披露下さった

11月28日（月）から12月3日（土）、5泊6日の日程で、北京ＹＭＣＡのスタッフ11名が、東京ＹＭＣＡで研修を受けた。

昨年5月にも行われたこの研修は、幼稚園園長研修、総務・広報／人事・労務研修、体育部門（水泳）研修の3グループに分かれて実施された。

初日の28日には、張替滋夫国際委員長、井口保雄国際委員（北京担当）、廣田光司総主事が出席して、歓迎夕食会が持たれた。

研修内容は多岐に渡り、幼稚園グループはグランチャ東雲、芝浦アイランドなどを見学し、総務グループは担当分野の座学に加えて行政との協働事業の例として高尾の森わくわくビレッジを見学した。水泳グループは、泳法指導法や対象理解、子どもクラスでの実習などの他、100M個人メドレーの検定試験など、ハードな研修を受け、終了後に認定書が授与された。

研修は午前・午後のセッションに分かれて行われたが、木場公園を見学した際、目前に展開された東京スカイツリーのパノラマに感激したこと、喜多方ラーメンの味に感動したこと、毎晩夕食後の自由時間に、東京都内の散策を楽しんでいたことも印象的であった。

（国際協力部　南宮成一）

2011年のクリスマス

教派の違いを超えて

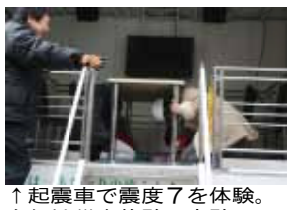
12月10日、カトリック吉祥寺教会で、武蔵野地域の15の教会とＹＭＣＡ・ＹＷＣＡが主催する「0422市民クリスマス」が開催された。教派の違いを超え、380人が集った。「0422」は、武蔵野地域の電話局番にちなんでつけられた名前で、事務局は例年どおり東京ＹＭＣＡ西東京センターが担った。

今年は、日本キリスト教団名取教会（宮城県）の荒井偉作牧師に「荒れ野に続く道」と題してメッセージをいただいた。荒井牧師は震災後、これまでさほど気に留めてこなかった聖句が心に響くようになったという。その一つがこの「荒れ野に道を備え（旧約聖書『イザヤ書』40章3節）」である。この聖句は新約聖書の中でも繰り返して書かれており、イエスが始めに宣教に向かったのは荒れ野であったことが示されている。「現代社会の荒れ野にもイエスは来てくださる。東北のあの瓦礫の山にも、仮設住宅にも、私たち自身の心が荒れ野のときにも、共に働いてくださる」と力強く語られた。

礼拝の後は、女性ヴォーカルデュオのナツメグの歌と、ICUハンドベルサークル“Bell Peppers”の清らかなクリスマスメロディーに、心暖まるひとときを過ごした。（広報室）

「0422市民クリスマス会」がカトリック吉祥寺教会で行われた。荘厳な聖堂は380人の来場者で満席だった。

東陽町クリスマス　オープンハウス



↑起震車で震度7を体験。今年は災害体験・実験コーナーが関心を集めた。

12月23日（金・祝）、恒例のクリスマスオープンハウスが開催された。晴天に見舞われ、4000人を超える方々が東陽町センターに足を運ばれた。今年のオープニングセレモニーでは、ウエルネスセンターKIDSクラスから代表して『新体操クラスの子どもたち（高学年）』が、元気な演技を披露してくれた。また今年度は、災害への関心の高まりを受けて、起震車や煙体験車、AEDなどの災害体験コーナーの他に、災害実験コーナーが設けられた。東陽町および江東コミュニティーセンターの災害チームにより、「液状化現象って？」「耐震住宅構造はこれだ！」「食用油と空き缶からろうそくをつくろう！」などの実験が行われた。

ゴスペルコンサートが、会場を華やかに盛り上げてくれた。

模擬店やバザー、近隣の小学校生徒による絵画展、チャリティーテニス・ラケットボール大会なども盛況で、収益金は目標金額を上回る約80万円強であった。

開催にあたっては、東陽2丁目町会、深川消防署、深川消防団、豊洲北小学校・数矢小学校・東陽小学校の教員みなさん、東陽町センターのメンバー・保護者、献品をしてくださった方々など、多くの方にご協力いただいた。今後も行政、地域、YMCAが一つに繋がり、この会を益々大きく展開していきたく思う。（東陽町ウエルネスセンター　草分俊一）

■３法人クリスマス会

12月15日（木）東陽町センターで、公益財団法人東京ＹＭＣＡと、学校法人東京ＹＭＣＡ学院、ＹＭサービス㈱が集まり「３法人クリスマス会」が行なわれた。礼拝では吉岡康子牧師（日本キリスト教団吉祥寺教会）に「傷が傷を癒す」というタイトルで奨励をいただいた。イエスが寝かされていた飼い葉おけには身を突き刺す麦わらや不潔なものがあり、客として来たのは鬼門とも言える「バビロン」からの博士たちと、無名な羊飼いたちだけだった。イエスが生涯にわたって負われていた傷が私たちを癒しているという現実を、東日本大震災等での被災の現実と合わせて、真の癒しは傷を負ったものから与えられる、と教えていただいた。

第２部は大きな悲しみへ祈りを合わせながら、希望に向かって歩もうという雰囲気の中、会食と懇談の時を持った。

（医療福祉専門学校　八尾 勝）

■国際部クリスマス祝会

12月17日（土）午後3時30分より、今年で５回目を迎える国際部クリスマス祝会が東陽町センターWell-Bで開催された。第一部礼拝では、元国連難民高等弁務官事務所職員の浅羽俊一郎氏より「国際事業への招き」と題し、個人の異文化体験の始まりから、国連難民事業へと転身した動機などが語られた。

第二部では、国際プログラム・パートナーシップ活動の報告会が持たれた。今年は「ポスター発表」という新しい手法を用いて、７件の活動発表がなされた。「キッズ・ワールドカップＩＮ韓国」に参加した小学生３名も特別参加し、可愛い感想を披露した。

第三部祝会はユース（若者）の中島瑞穂さんと細川晋之祐さんの司会で行われ、評議員の山本和さんの乾杯の後、楽しい会食の時となった。参加者が持ち寄った食べ物・飲み物など様々なものが振舞われた。

参加者は50名余りとなったが、2011年に実施された国際関連プログラムを振り返りながら、次年度へ向けた抱負が熱く語られた。

（国際協力部　南宮成一）

■インターナショナルスクール

インターナショナルスクール（ＴＹｉＳ）の生徒62名が、12月14日、お隣の特別養護老人ホーム江東ホームに行き、クリスマスソングを歌った。ホームの方たちに暖かく見守られながら、全11曲をアカペラで披露。歌い終わった後は、一人ひとりに握手！　たくさん褒めていただき、子どもたちは、まるでスター気分だった。

（ＴＹｉＳ　長谷川博子）

■にほんご学院「忘年会」

12月15日（木）、にほんご学院では「忘年会」と称し、お昼の多国籍料理持寄りパーティーを行った。世界８カ国から集まった受講生たちと、講師、一時保育を支えてくださっている「みずべの会」の先生方、職員が一同に会し、韓国、中国、インドネシア、フィリピン、日本の手料理を囲み、覚えたての日本語を使いながら、楽しいひとときを過ごした。

食事の後は、全員で「もしもしカメよ、カメさんよ～」の手遊びに挑戦。受講生の連れてらした２歳のお子さんたちも参加し、会場は暖かな笑いに包まれた。

（にほんご学院　柳原みずき）

シリーズ　資料室の窓から〈77〉
幻の図書に出合う

本会元副総主事　齊藤　實

幻の図書に出合った。昨年暮れである。気に掛かっていたことの一つが解決して、いまは気持ちよく資料室の新年を迎えている。気になっていたのは歴史資料が満載されている機関誌『東京青年』の広告ページであった（写真）。ＹＭＣＡの広告は多くが刊行物の広報であった。しかし、自らの刊行物について、これを「歴史資料として保存する」という構えを東京ＹＭＣＡは持たないまま、今日に及ぶ。だから刊行した現物を手にして当時の時代背景を思うことはできないでいる。不満であった。

ところが、昨年中に寄せられた資料を整理していて、貴重な文献に出合えた。バプテスト教会の神学者ラウシェンブッシュの『新社会建設のため（祈祷書）』（菊半裁版・文庫版）が出てきたのである。東京ＹＭＣＡの歴史を辿るために何回もページをめくった『東京青年』には、この書物が「基督教思想叢書第八輯第一巻」として出版されたという広告が刊行直後の1932年6月号以来しばしば載っていた。発行元は「東京ＹＭＣＡ会館四〇四号室・基督教思想叢書刊行会・発行者齊藤惣一」である。『東京青年』1933年1月号巻頭の「われらの都市のため」と題する一文も、この「ラウシェンブッシュの祈り」の一つであった。手にしたかったこの祈祷書は、東京ＹＭＣＡ主事であった中原眞澄から寄贈された。尊父・同盟学生部主事故中原賢次の蔵書であった。刊行の4年前1928年に賢次はエルサレム世界宣教大会（議長モット博士）に出席、日本基督教連盟は《社会信条》を発表していた。1929年には、同連盟が来日のモット博士の後援を得て「神の国運動全国協議会」を開く。小林多喜二が『蟹工船』を、藤村が『夜明け前』を発表したのもこの年である。全国の基督教学生運動「SCM」が同じ英文表記の社会的基督教運動へと転換する時期でもあった。政府中枢のブレーキが効かなくなった陸軍は関東軍が満州事変を起して一年、上海事変と続いて。時代は暗さを増していた。